

中山間地域活性化を担う人材の養成

－ 能登の里山里海マイスター養成の取り組みに学ぶ －

開催主旨：

栃木県の中山間地域には、美しい郷土景観、おいしい食材、農村とのふれあい、生物多様性など、豊かな地域資源が認められますが、農林水産業の衰退や人口の減少、高齢化等に伴い、管理の放棄や利用低下が進んでいます。一方では、農産物の加工による六次産業化、農村環境のツーリズム利用、児童・生徒の環境学習、大学生の研究活動など、都市農村の交流によって豊かな地域の実現につながるような新しい取り組みも生じています。この講演会は、石川県の能登半島で、地方自治体と連携して地域活性化を担う人材の養成活動に取り組み、定住化や新たな産業の振興で先進的な成果を挙げている、金沢大学学長補佐中村浩二特任教授を招いて、栃木県の中山間地域を活性化するために要となる人材を養成するための創意工夫を学ぶために開催するものです。

主催：栃木県・宇都宮大学地域連携教育研究センター

日時：9月3日（水） 栃木県庁本館 6階大講堂 1

対象：栃木県・市町職員及び、関係団体職員、NPO、大学関係者等

日程及び内容：

13：15 開会

主催者挨拶 吉澤 豊（栃木県農政部農村振興 課長）

趣旨説明 高橋 俊守（宇都宮大学地域連携教育研究センター 准教授）

13：25 講演

講演 中山間地域活性化を担う人材の養成

－能登の里山里海マイスター養成の取り組み－

講師 中村 浩二（金沢大学学長補佐 特任教授）

講師プロフィール： 金沢大学の里山里海プロジェクト代表として、全体を統括。能登の里山里海の生態系の保全・活用に向けた教育・研究の実施、自然と共生し環境配慮型の農林水産業を基盤とした地域再生、これからの能登を担う人材の育成に取り組んでいる。専門は生態学。

15：15 閉会

参加申込み： 栃木県農政部農村振興課 中山間地域担当 大野 等

TEL：028－623－2334

地域と大学、活性へ思い共有 能登里山里海マイスター

(2014年4月4日午前10時00分)

🔍 写真を拡大



公民館で行われた実習で、住民から集落の移り変わりや聞く受講生、地域の資源や悩みを肌で知る貴重な体験になる＝石川県珠洲市

🔍 写真を拡大



午後の実習に向け、集落調査の手法を学ぶ受講生。講義はリラックスした雰囲気の中で行われる＝石川県珠洲市の金沢大能登学舎

石川県・能登半島の東の端。金沢市中心部から約150キロの場所に、廃校舎を活用した金沢大能登学舎(珠洲市)がある。ここに月2回、県内外から集まってくるのは、「能登里山里海マイスター」の20～40代の受講生たちだ。

同マイスターは、金沢大、石川県、奥能登4市町による人材育成事業。2月中旬に行われた実習では、近くの公民館を訪れ、地元の人から集落の移り変わりを聞いていた。地域の資源や悩みを肌で感じながら調べ、その後の活動に生かす狙いがある。

農家、水産会社勤務、県・市の職員、医師、主婦…。昨秋に“入学”した2期生42人の顔触れは実に多彩で、うち10人は地元4市町へのI-Uターン組。将来的に移住を希望する東京からの受講生2人も、羽田―能登便で通っている。

金沢大などの研究者や、地元の農林漁業者、自治体関係者が教壇に立つ。講義テーマは環境に配慮した農業、里山林の管理、地域ブランドなどさまざま。地元詳しい講師も必ず参加する。

金沢大里山里海プロジェクト研究代表の中村浩二特任教授は「農業やビジネスのことだけでなく、里山里海の問題や生態系について幅広く考えられる人材を育成している」と話す。



前身となった「能登里山マイスター」は2007～11年度に行われ、62人が“卒業”。その8割超が奥能登に住み、活躍している。

OBの一人の水産会社社員は、会社が農業部門に参入したときを中心となった。花き小売会社の社員は能登のサカキの商品化に成功した。製炭職人は茶道用の高級炭の産地化を目指している。耕作放棄地での植林にも取り組む。

12年秋から現在のマイスター事業がスタート。カリキュラムは2年から1年に短縮されたが、さらに熱意やキャリアのある人が集まっている。

昨年、夫婦で能登島(七尾市)にやってきた受講生の長竹幸子さん(46)は、東京・赤坂でシェフの夫とフランス料理店を経営していた。今年の夏、能登島でレストランを開く予定だ。他の受講生とともに、地域を盛り上げるためのサークル結成も計画する。長竹さんは「ここにいるのは里海や里山を何とかしたいと思う人ばかり。だから“共同体”になりやすい」と話す。



能登学舎には、地元の珠洲市内で暮らす30、40代の常駐スタッフが6人いて、受講生の指導や事務を担う。川島平一学舎長も、数年前まで同市内に単身赴任していた。「大学が一つの事業でこれだけ多くの常駐者を置くのは珍しい」らしい。

スタッフの1人で珠洲市に移り住み7年になる金沢大博士研究員、小路晋作さん(42)は「子どもの教育など、奥能登の問題を自分のこととして考えるようになった」。大学と地元が一体となった人材育成の取り組みが、着実に成果を出している。